

文＝五月女善重  
(五月女総合プロダクト)

## 孤独の代償

中途採用に新卒募集…。弊社でも、さまざまな面接が頻繁に行われています。以前は僕も立ち会っていたのですが、最近では任せられる社員が育ってきたので、同席する機会も少なくなりました。

面接担当から聞く求職者の声は、何かと興味深いものがあります。ある中途入社希望のA君はこう言ったそうです。

「二代目社長って、何もしないじゃないですか。前社の二代目がそうでした」

世間から、僕らが「苦労知らずのボンボ

知人の弁護士、M氏に聞いた話です。先ごろ施行された裁判員制度に関するアンケートでは、多くの方が「自分は裁判官ではないから人を裁くことなど出来ない」と辞退の意向を示したそうです。しかし、制度の主目的は『市民が持つ日常感覚や常識を裁判に反映すること』です。たとえば、女性にしか分からない心理や、子供を亡くした親にしか理解しえない状況など、裁判員候補者には『その経験があるからこそ』の判断が求められるというのです。M弁護士によると、「市民は裁判官になつてはいけない、重要なのはその立場の者にしか分からない目線で物事を見る」ことだそうです。

言い換えれば、カテゴリーの違う相手を理解するのは非常に困難だということでしょうか。だからA君には二代目社長が何もしないように見えたのでしょう。

僕らの宿命として、周囲から「親が創業者だから社長をやれているのだろう」と邪推されることもあ

学生時代はテスト範囲さえ勉強すれば良い点が取れましたから、「何事もコツをつかめばうまく行く」と若者らしい勘違いをしていても、いざ企業運営に関わると、その奥深さに「経営に範囲はない」と思い知らされ、現実を鼻をへし折られるのです。ですから、何もしない二代目というのにはあり得ない話なのです。

こそ僕は、「何もしない」と言われてしまった二代目氏の苦悩や、会社のために粉骨砕身している状況が、同じ立場ゆえに容易に想像できて、心が痛むのです。



さおとめ・よししげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を体験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在9店舗を経営。1965年生まれ。筆者へのメッセージはホームページから<http://www.saotomesp.jp/>

僕たち二代目は、あえて誤解を恐れずに言えば、昇格に一喜一憂するサラリーマンではありません。ですから「こんなに頑張っています」と周囲にアピールする必要はないのです。サラリーマンではありませんから、同期と飲みに行ったり、腹を割ってプライベートなことを話したころ、周囲が僕を、腫れ物に触るようになっていたのも知っています。僕たちは、チャホヤされたり、嫉妬や揶揄を受けたり、緊張されたり：フラットな気持ちで対応してくれる人には、なかなかめぐり合えない立場にいるようです。

それは僕を孤立させてしまったのですが、立場の意味が納得できた瞬間、その孤独ともうまく付き合えるようになっていったのです。

孤独の代償として僕たちは、アピールする必要もない立場を手に入れたのかも

AI